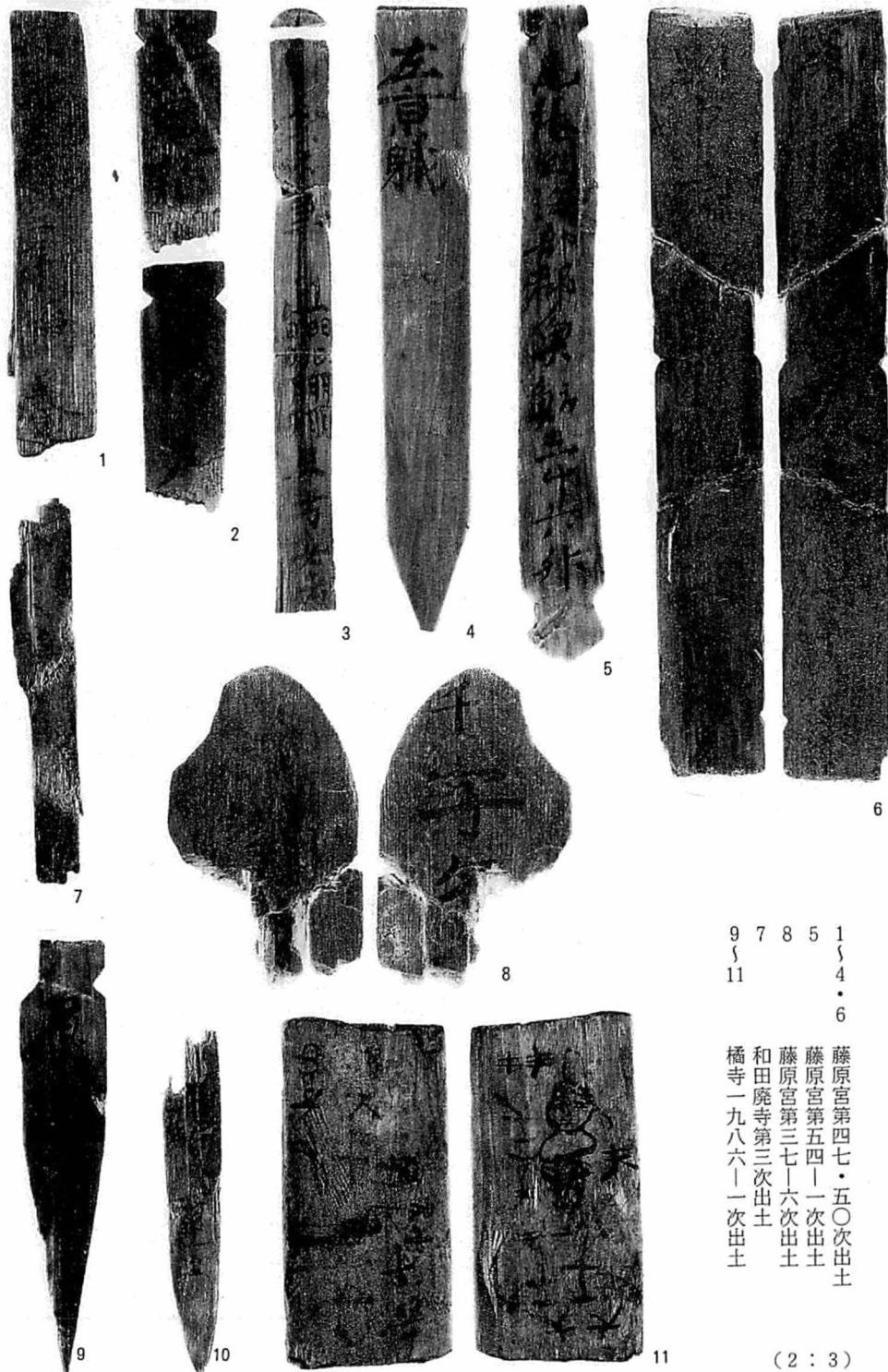


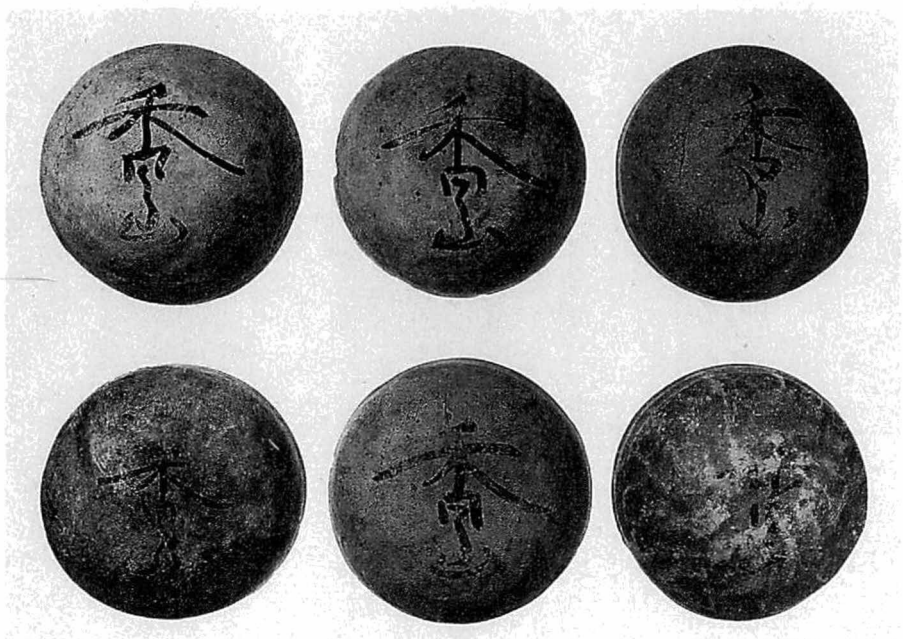
一九八七年五月

飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(八)

奈良国立文化財研究所



9 7 8 5 1
 } 4
 11 } 6
 藤原宮第四七・五〇次出土
 藤原宮第五四一一次出土
 藤原宮第三七一六次出土
 和田麿寺第三次出土
 橘寺一九八六一一次出土



藤原宮第47次井戸 S E 4740出土



藤原宮第41次出土



藤原宮第48—3次出土



石神遺跡第5次出土

この概報は、さきに公刊した『藤原宮出土木簡(六)』(一九八三年五月)以後、飛鳥藤原宮跡発掘調査部の行なった発掘調査で出土した木簡について、その主要なものを収録した。木簡が出土したのは、藤原宮第三七・三七一六・四一次調査(以上藤原宮)、藤原宮第四七・五〇(西)・五四一一次調査(以上藤原京)、和田庵寺第三次調査、橘寺の調査である。以上の他に石神遺跡第五次調査、藤原宮第四一・四七・五〇(西)・四八一三次調査で出土した木簡以外の文字資料についても主なものを付載した。

次に木簡等の出土地点と状況について略述するが、その詳細については当該年度の『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』『奈良国立文化財研究所年報』等によらねたい。

なお、この概報については従来藤原宮出土の木簡が大部分を占めていたことから『藤原宮出土木簡』と題し、正式名称の『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』を副題としてきたが、今回は藤原京や飛鳥の諸寺出土の木簡が多く、このままの題では不適切であるので、後者の題だけを掲げることにする。今後藤原宮出土木簡のみを収載する場合もこれを継続し、『藤原宮出土木簡』の名称は用いないこととする。

一、木簡等出土の地点と状況

藤原宮第三七次調査(6AJK1F区)

一九八三年八月～二月
本調査地は藤原宮の西面で、宮の東西中軸線上の西面中門推定地および西面外濠地域である。面積は一〇〇八㎡である。検出した主な遺構は、西面大垣と外濠で、予想された西面中門は後世の削平をうけて検出できなかった。その他には藤原宮期以後の井戸や土坑がある。木簡は外濠から二点出土した。

大垣SA二五八は調査区南端で四間分の柱掘形を検出した。西面中門は検出できなかったが、大垣の柱掘形がとぎれる所から北が中門跡と考えることができる。宮の中軸線と今回検出した大垣の北端までの距離を北へ折り返すと南北三〇・四mとなり、これまで調査した宮城門と同規模の門が存在したものと考えられる。

西面外濠SD二六〇は大垣の西方一三mにあり、北流する。現状では後世の氾濫や浸食により東岸がかなり広がっているが、当初は他の外濠と同じく五・五m×六・〇m程であったとみられる。深さは二・一mである。宮の廃絶後、

濠の中央付近に南北にシガラミが作られ、その西では堆積が固定したらしいが、東では水流が何度も流路を変えて流れた。濠は一〇世紀末頃には埋没したらしい。総じて藤原宮時代の遺物は乏しく、出土土器の七〇％は奈良時代前半のもので、平安時代のものも混じる。木簡は、一点は最下層のシガラミ設定以前の層で検出したが、これは奈良時代か藤原宮期に入るのかは決定できない。小断片で文字は判読できなかった。他の一点はシガラミ付近から出土したもので、奈良時代の可能性がある。

他の遺物としては、土器、瓦のほか、円面硯、土馬、銭貨（和同開珎・神功開玉・隆平永宝・富寿神宝・饒益神宝）、帯金具、鉄釘、鉄棒、多足机等が出土し、墨書土器では「宮」と記したものが六点ある。

藤原宮第三七―六次調査（6AJM―C区）

一九八三年八月―九月

本調査地は宮の西南方に当たり、南外濠と六条大路北側溝との間の外周帯と仮称している空闲地内で、一部大路北側溝も含んでいる。面積は六三〇㎡である。

検出した主な遺構は、南北溝一条と井戸一基である。木

簡は井戸から一点出土した。

南北溝SD三四六〇は西二坊坊間路の中軸線の位置にはほぼ一致し、幅五―六m、深さ一・四mで、宮の外濠と同規模であることからみて、南面外濠へ注ぐ京内の基幹排水路として作られた可能性がある。

井戸SE三四六一はSD三四六〇の西一四mのところであり、深さ二・六mで、井戸枠が六―七段残っており、井籠組で、東西九五cm、南北七五cmある。埋土は灰色粘質土で、その中から木簡が一点出土した。他に遺物は少なく、弥生式土器片、七世紀末頃の土器片がある。

藤原宮第四次調査（6AJF―B区）

一九八四年四月―一〇月

本調査地は大極殿の東北で、内裏外郭塀の東約四〇m、宮東面大垣の西方二二〇mに当たる東方官衙地域で、面積は一二六〇㎡である。

検出した主な遺構は、藤原宮期の約一二・七m離れて並行する二条の掘立柱東西塀で、長さ五〇m以上あり、それぞれ東端で南と北にL字状に曲り発掘区外に延びる。この塀は南北二つの官衙ブロックを区画する塀とみられ、北塀

SA三六三〇の北と南塀SA三六三二の南が官衙内であり、両塀の間は通路であろう。この種の塀としては宮内ではじめて検出したものである。この他の遺構としては、平安時代の小規模建物や塀・井戸、古墳時代の、角柱を用いた棟持柱を持つ総柱建物や溝等がある。

遺物は、木簡・墨書土器・瓦・須恵器・ミチュア杯・緑釉陶器・新羅土器・滑石製石鍋・錢貨（神功開宝）等がある。墨書土器は平安時代初頭の井戸SE三六五五から出土したものである。

木簡は東西塀SA三六三〇の三個の柱掘形中から三点、東西塀より古い七世紀後半の土坑SK三六四七から一点出土した。掘形中のは断片や削屑で、うち一点は全く判読できない。SK三六四七出土のものは長さ四五・五cm、幅四・二cmあり、曲物用材のような薄い板で、表裏に墨痕があるが、腐蝕が甚だしく判読不能である。

藤原宮第四七次・五〇次(西)調査(6AJCIN・6A

JD1H区)一九八五年一月～一九八六年二月

橿原市木之本町の香久山西麓において当研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部の新庁舎建設のため一九八五年の第四五・

四六次調査に続いて第四七次・五〇次(西)調査を行なった。庁舎予定地は総面積二〇〇〇㎡で、ほぼ藤原京左京六条三坊の東北坪と東南坪に当たると。このうち第四七次・五〇次(西)調査地は庁舎予定地西よりで、六条三坊の中心部および東北坪西南部に当たる。両調査地は東西に接しており、面積は合わせて四〇〇〇㎡である。

第四五次から第五〇次までの調査の所見を簡略に述べると、遺構は古墳時代から室町時代まであり、そのうち藤原宮期はA・B二時期に大別できる。

A期は道路と区画の塀を中心とした時期で、東三坊坊間路、六条条間路、坪の周囲を限る塀、坪を東西あるいは南北に二分する塀などである。坊間路は八二m、条間路は六〇m分を検出したが、条間路は想定位置より約一四m北にある。両路は調査地西端で交差する。建物は、東南坪に小規模建物二棟、東北坪に三棟ある。この三棟の建物は柱筋を揃える関係にあるが、その性格は今のところ不明である。条間路の北には東西大溝SD四一三〇があり、奈良時代にも存続する。調査地東端の香久山に近接する付近には幅一九m以上、深さ一・二mの南北大溝SD四一四三があり、東三坊大路想定位置に当たると、大規模であることから藤

原京の東堀河である可能性がある。先の東西大溝SD四一三〇はこのSD四一四三に接続する。

B期は道路や区画の堀が大きく改められ、大規模な建物が整然と配されて坊内の利用状況が一変する時期である。

まず条間路・坊間路や、東南坪を南北に分ける堀は廃され、東北坪・東南坪とも坪内を東西に二分する南北堀SA四三二〇より西が一体のものとして利用され、東半部は空閑地となっていたようである。

建物は、坊間路・条間路が交差していた位置のやや南の位置で、坊の中心に当たるところに七間×三間の身舎に土庇のついた東西棟建物SB五〇〇〇があり、これを中心に八棟の東西棟建物や南北棟建物が整然と並ぶ。SB五〇〇〇はこの建物群の正殿とみられ、前殿や脇殿に相当するとみられる建物もある。

これらの建物群は正殿が坊の中心部に来るので、一坊全体の占地に基く配置と考えられるが、一坊の占地は藤原京では初めての検出例である。その性格については明確ではないが、一応官衙的なものと考えている。もしそうであれば、そのような大きな占地をとる京内官衙は何であるか、その京内での位置も含めて十分検討する必要がある。

次に奈良時代になると、大規模な区画施設や整然とした建物群はみられなくなるが、なお建物一〇棟が検出されており、引き続き重要地域として機能していたようである。

調査地南方では堀と溝による方形区画内に南北に並ぶ二棟の東西棟建物を配置しており、北方では総柱の倉庫風建物や、東西に並ぶ小建物がある。また藤原京A期以来の東西大溝SD四一三〇がこの時代にも存続しており、その第四七・五〇次(西)調査地内で木簡・墨書土器が出土した。また四七次調査地には大溝の南岸に接して井戸SE四七四〇があり、呪符・墨書土器が出土した。

東西大溝SD四一三〇は坊の想定心から三六m北の位置にあり、総長二二〇m分を検出した。東方では幅四・五m、深さ一・五mであるが、西に向かって次第に深くなり、調査地西端では幅一一m、深さ一・八mを測る。東端は南北大溝に接続するが、溝底のレベルからみて西流していたとみられる。北岸は比較的直線的で、当初の姿をとどめてみるとみられるが、南岸は大きくえぐられた部分がある。堆積土は下から茶褐色砂礫・青灰色粘質土・灰褐色粘質土および淡い褐色粘質土に分けられる。茶褐色砂礫層は溝底にわずかに残存し、七世紀代の遺物を含み、この溝の開削が

藤原宮期にまでさかのぼることを示している。青灰色粘質土は奈良時代の層で、何度も流路を変えながら流れた様子がかがえるが、しだいに滞水するようになり、平安時代になって埋め立てられた。

この溝からは多数の遺物が出土しているが、藤原宮期のものは少なく、奈良時代から平安時代にかけての遺物が多い。主な遺物としては、木簡二五点、墨書のある斎串一点、「香山」の墨書土器三点など墨書土器六一点、陶硯・緑釉獸脚硯・黒色土器風字硯・土馬・製塩土器・ミニチュア土器・鞆羽口・バルメット押捺文軒丸瓦・人形・斎串・刀子形・馬形・木針・櫛・琴柱・鉄釘・和同開珎が出土した。木簡と墨書のある斎串は東西大溝のうち、南岸に接する井戸付近から西の奈良時代の層から出土した。靈龜三年の年紀のみられるものがあり、他の木簡も奈良時代前半のものとしてよいであろう。

奈良時代の香久山西北麓は木簡・墨書土器の内容からすると、養老四年に存在の知られる香山正倉のあった可能性があり、東西大溝SD四一三〇はその物資運搬のために利用されたことも考えられる。

東西大溝SD四一三〇の南岸に接する井戸SE四七四〇

は、方形横板組で、内法一辺〇・九mあり、横板は平均一二枚程のこり、高さ三・〇m内外である。掘形は上端が径約六mの不整形で、底部は一辺一・七m内外の方形となる。深さは三・六mある。井戸枠内からは呪符一点の他、墨書土器三点、土師器・須恵器・黒色土器・瓦・鎌・環状鉄製品・鉄釘・小環付金銅製細棒・無文銀銭・和同開珎等が出土した。土器は最下層から飛鳥IVから平城宮III段階、下層から平城宮III段階、中層から平城宮IV段階、上層からは九世紀十世紀初頭のものが出土した。呪符は最下層からであり、墨書土器の大部分は下層からの出土である。

藤原宮第五四―一次調査（6AJC―L区）

一九八七年四月

本調査地は藤原京左京八条三坊西北坪の東南部に当たり、第五〇次（西）調査地の西約二〇mの地点である。南北一・八m、東西三mの調査区で、面積は三八m²である。

検出した遺構は第五〇次調査地より続く東西大溝SD四一三〇であるが、想定位置より約一〇m北で南岸を検出したので、この地点と第五〇次調査地との間で溝が屈曲しているとみられる。調査地の関係で溝の南岸から北二・六m

まで検出しただけで北岸に達していない。深さは一・六mで、堆積は三層あり、中層の青灰色粘土から木簡一点が出土した。その他の遺物としては上層からバルメット押捺文軒平瓦、下層から四天王寺系丸瓦等が出土している。

橋寺一九八六一一次調査(5BTB1B区)

一九八六年九月十一日

本調査地は明日香村大字橋にある橋寺の北西約一七〇mの地点で、橋寺とその北に位置する川原寺との旧境界と考えられる里道の南側である。調査地は東西二か所に分れ、面積は一六〇㎡である。検出した主な遺構は、東西掘立柱塀とその北雨落溝、東西築地塀とその雨落溝、土坑等である。遺構は大別してⅠ期(七世紀後半)・Ⅱ期(八世紀中頃)・Ⅲ期(中世)の三時期に区分できる。

Ⅰ期は東西掘立柱塀とその北雨落溝で、掘立柱塀は東区で二間分、西区で一間分を確認し、一五間分が復原できる。雨落溝は塀心から三m北にある竪掘り溝である。

Ⅱ期は土坑で、東西四・五m、南北三・五m、深さ一・五mある。炭灰や礫を多量に含む黒灰土と、木材片や木葉を大量に含む茶褐色土が堆積しており、一度に埋められた

らしい。土器・瓦・木材片・木簡・薪の燃えさし・鉄鎌などの金属製品・獣骨等が出土し、造営工事の廃材や塵芥を投棄したゴミ捨て穴と推定される。この土坑やⅡ期整地層から出土の瓦は川原寺創建瓦を含む七世紀後半のもの、土器は藤原宮期から奈良時代中頃のものである。中に「山」「日月」と記した墨書土器がある。木簡は九点出土した。

Ⅲ期は東西塀から九・五m北に設けられた築地塀とその北雨落溝、土坑等である。築地は基底部幅三m、残存高約五〇cmで、築地本体は削平されていた。雨落溝は築地の北二mにあり、深さ一・二m、復原幅二mで、鎌倉時代ノ室町時代初期の土器・瓦が大量に出土した。この築地は以前確認している橋寺北限の築地塀の西延長部で、今回北門心から一五四m分確認したことになり、西限はさらに西に延びる。築地基底部出土の遺物からみて、前身の築地があったとしても八世紀中頃以前にはさかのぼりえない。それ以前は南の東西塀が北限施設であった可能性が生じてくる。これらの塀や築地は川原寺の伽藍方位に一致し、遺物の上でも同寺と共通するものが多いから、古代においては橋寺の北限は、官の大寺で寺勢が盛んであった川原寺の強い影響下にあったと考えられる。

和田庵寺第三次調査（5BWD—G・K区）

一九八六年一月～二月

本調査地は檀原市和田町に所在し、古代の山田道の後身かと推定される県道檀原神宮東口停車場線の北側に接する水田である。第二次調査で検出した塔跡（大野塚）の東南約一二〇mに当たり、寺域東南部の状況と藤原京朱雀大路および山田道との関連の解明などを目的として調査した。

調査地は南北二地区に分れ、面積は二四五㎡である。

北区は全体が東南から西北への流路内とみられ、弥生時代から中世の遺物まで混じりあっており、その下限は一三世紀頃と推定される。古墳時代土器や中世の土器類は多量に出土したが、藤原宮期、奈良時代の土器・瓦は少ない。他にるつば・輪羽口・鉢滓など鑄造関係の遺物、滑石製有孔円盤一点、延喜通宝一点、木簡二点が出土した。木簡は古代のものとみられるが中世遺物と共に出土したので、はっきりした時期はわからない。

南区では東西長九m計一一個の中世の立石列を検出した。現県道が「山田道」を踏襲しているならば、中世の「山田道」の北路肩の護岸の可能性があるが、また西に存在する薬師堂の前身遺構とも考えられる。

石神遺跡第五次調査（6AMD—T区）

一九八五年七月～一九八六年二月

本調査地は明日香村飛鳥の飛鳥寺の西北約三〇〇mに当たり、面積は九六〇㎡である。石神遺跡はいわゆる須弥山石や石人像が発見された場所であり、斉明朝の饗宴施設ではないかという想定で昭和五十六年以来調査を継続し、斉明朝から藤原宮期に及ぶ建物・堀・石敷・石組溝・井戸などの遺構を確認している。その結果、多数の遺構が密集し、しかもかなりの広がりを持つらしく、また短期間に多くの変遷があることがわかってきた。だが、その範囲や具体的な性格の確認に至るにはなお時日が必要である。

第五次調査においても七世紀中頃から八世紀初頭に至る時期の遺構の内容と変遷がより明らかになったものの、状況は同じである。

本調査においては、藤原宮期とみられる素掘り南北溝SD六四〇からヘラ書き銘のある須恵器壺一点が出土した。この溝は幅二m、深さ三〇～四〇cmあり、東に一一m距てて並行する同規模の溝があるので、南北道路の側溝の可能性はある。この溝の遺物は天武朝から藤原宮期までのものを含んでいる。

藤原宮第四八一三次調査(6AJB-R区)

一九八六年四月～五月

本調査は藤原宮大極殿の東北約三〇〇mの東方官衙の一画でおこなった。面積は三〇二㎡である。

検出した主な遺構は、藤原宮期の掘立柱東西棟建物SB四八六〇で、桁行六間以上、梁行二間以上とみられる建物の西妻柱と南側柱筋の七個の柱穴を検出した。柱掘形は一辺約一・三m×二m、深さ〇・九mの不整隅丸方形で、柱根や柱痕跡の残るものと、柱抜取穴のあるものがある。その一つの掘形の底から墨書のある須恵器皿が出土した。なお南側柱から南へ三・一m距てて小柱穴が柱筋を揃えて並び、広縁風の露台の可能性が有る。

この他の遺構としては藤原宮に先行する四条条間路とその側溝、古墳時代の掘立柱建物などがある。

二、凡例

(一) 口絵写真のうち木簡は同一縮尺であるが、墨書土器等は大小の差が大きいため縮尺は考慮外とし、文字部分だけの写真を掲げたものもある。法量も特に示さなかった。

(二) 積文は出土遺構ごとに掲げ、同一遺構の中では、内容

分類によって、文書、付札、その他の順に配列するのを原則とした。

(三) 最上段に出土地点を示す小地区名(アルファベット・数字)、次の段に現在遺存の形態を示す型式番号を記した。型式番号は次の通りである。但し本研究所では型式番号は四桁の数字を用いるが、本概報では時代を示す千の位を省き三桁の数字で表わした。なお端とは、木簡を木目方向に置いた時の上下両端をいう。

6011型式 長方形の材のもの。

6015型式 長方形の材の側面に孔を穿ったもの。

6019型式 一端が方頭で、他端は折損・腐蝕などによって

原形の失われたもの。原形は6011・6022・6051型式のいずれかと推定される。

6021型式 小形矩形のもの。

6022型式 小形矩形の材の一端を圭頭にしたもの。

6031型式 長方形の材の両端の左右に切り込みをいれたもの。方頭・圭頭など種々の作り方がある。

6032型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれたもの。

6033型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他

端を尖らせたもの。

6039型式

長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損、腐蝕などによって原形の失われたもの。原形は6031・6032・6033型式のいずれかと推定される。

6051型式

長方形の材の一端を尖らせたもの。

6059型式

長方形の材の一端を尖らせているが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。原形は6033・6051型式のいずれかと推定される。

6061型式

用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの。

6065型式

用途未詳の木製品に墨書のあるもの。

6081型式

折損・割截・腐蝕その他によって原形の判明しないもの。

6091型式

削屑。

四 積文に加えた符号はつぎの通りである。

く く 抹消した字画のあきらかな場合に限り原字の左傍に付した。

■ 抹消により判読困難なもの。



欠損文字のうち字数の確認できるもの。



欠損文字のうち字数が推定できるもの。

□ □ 欠損文字のうち字数が数えられないもの。

□ □ 記載内容からみて上または下に少くとも一字以上の文字を推定したもの。

┌ └ 異筆、追筆。

┌ └ 合点。

・ 木簡の表裏に文字のある場合、その区別を示す。

カ 編者が加えた注で疑問の残るもの。

マ マ 文字に疑問はないが意味の通じ難いもの。

〔 〕 校訂に関する注のうち、本文に置き換わるべき文字を含むもの。

() 右以外の校訂注および説明注。

④ 積文下段のアラビア数字は、木簡の長さ・幅・厚さを示す(単位はミリメートル)。欠損・二次的整形の場合、現存部分の法量を括弧つきで示した。なお長さ・幅は木簡の字の方向による。

⑥ 積文の上に付した括弧付き数字は図版一に、*印は図版二に写真を掲げたものである。

第四七・五〇次(西)調査(6AJCIN・6AJDIH)

井戸SE四七四〇

(3)
NF
29
061

不熟 (符籙)未方女者

(上面ニ墨線アリ)(呪符) 150
15
5

東西大溝SDD四一三〇

(1)
NI
33
081

収靈龜三年稻 養口

(118)
(20)
4

(6)
NH
32
011

・菜採司謹白奴 嶋逃

・別申病女 ^以前 如

203
29
3-5

NH
36
081

斤得三束 ^遣二束

(302)
18
4

NI
32
091

百廿七束一 ^把

(58)
(23)

NH
35
081

・四月 ^廿日

・代 ^三斗 …

(51)
+
(26)
32
2

NH
36
081

斗四升

97
(17)
3

NH
35
081

小豆

(84)
29
4

NI
32
081

十八文

(59)
21
3

NH
35
081

^人夫等

(41)
(18)
1

(2) NI 33 039
・近江國補□^(生)

・宿□戸□

(95) 22 4

橘寺一九八六一一次調査(5BTB-1B)

土坑SKO五

NI 32 032
六斗

135 22 5

032
・^{〔香〕}
□川郡□□郷□□□□
158 21 3

(4) NI 31 061
左京職 (齋串)

163 23 6

・
□十一□□

(10) 059
奥煮(連上)
(92) 15 2

第五四一一次調査(6AJC-L)

東西大溝SD四一三〇

(9) 033
煮凝
114 23 2

(5) LJ 47 031
尾張國海部郡奥貳三斗六升

172 20 5

(11) 011
・(戯画と「夫」「大」「干」などの文字)

・(戯画と「大」「干」「夫」などの文字)

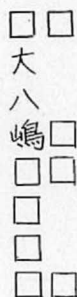
92 43 6

和田麿寺第三次調査 (5 B W D | G · K)

旧 流 路

(17)

081



081



(101)

(16)

5

*



(黑色土器椀A底部外面)

(159)

19

3

第四八―三次調査 (6 A J B | R)

東西棟建物SB四八六〇柱掘形

* 加之伎手官

(須恵皿底部外面)

《墨書土器等》

第一次調査 (6 A J F | B)

井戸SE三六五五

* 香山 (八点・土師椀C底部外面)

香山 (土師皿A底部外面)

香山 (土師蓋つまみ上面)

□山 (土師杯A底部外面)

□山 (土師皿底部外面)

安 (土師皿A底部外面)

宅 (土師杯A底部外面)

宅 (土師椀C口縁外面)

香山 (二点・須恵杯B底部外面)

香山 (土師椀C底部外面)

香山 (土師杯A底部外面)

□山 (土師椀C底部外面)

香□ (土師椀A底部外面)

香 (土師皿底部外面)

香 (土師蓋つまみ上面)

多母□ (須恵杯B底部外面)

荒田大年 (須恵壺底部外面)

大□

(土師皿A底部外面)

福

(二点・土師蓋頂部外面)

飛

(二点・土師碗C底部外面)

佐

(土師碗C口縁外面)

佐

(土師杯 底部外面)

□町

(土師皿A底部外面)

宇尼

(土師碗C底部外面)

宅

(土師杯又作皿底部外面)

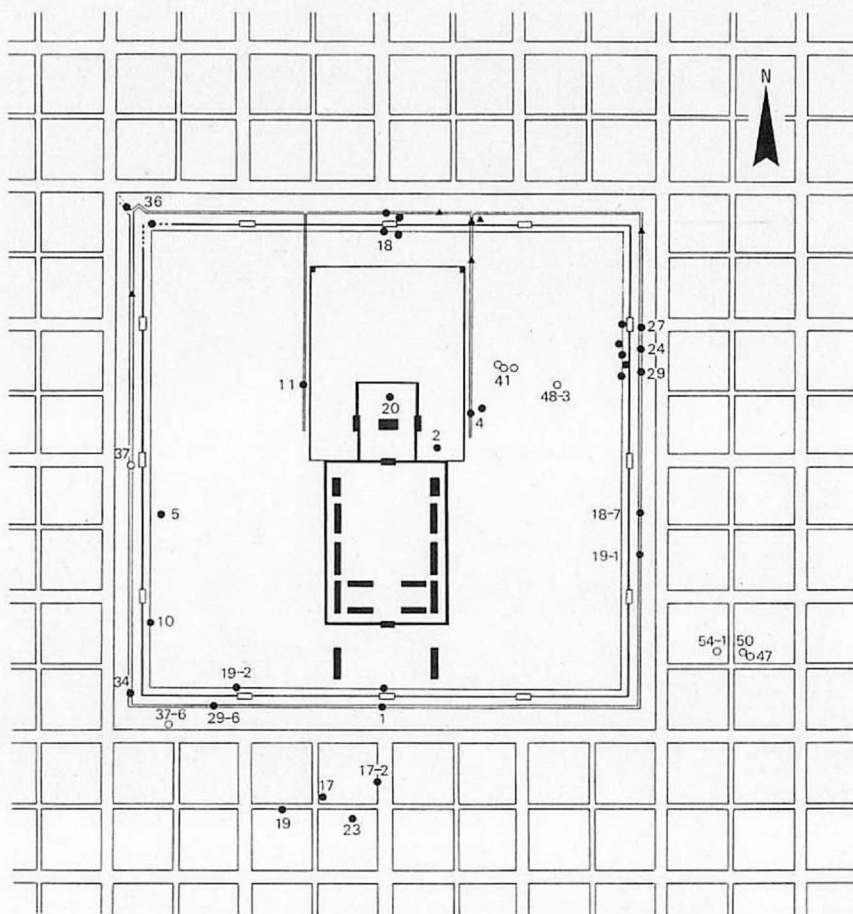
石神遺跡第五次調査(6AMD1-T)

南北大溝SD六四〇

* 倉五十戸

(須惠壺底部外面)

藤原宮木簡等出土地点略図



- 本号収載分出土地
 - 既出土地
 - ▲ 奈良県調査出土地
- 数字：調査次数